▨巻　頭　言▨

説　明　力

茨城県霞ケ浦環境科学センター長　　前　田　　修

情報や状況を相手に的確に伝える能力を「説明力」と呼ぶことにします。筆者は日常業務の中で，説明力の必要を痛感しています。

「地方環境研究所」をネット辞書で引くと，「自治体が関係法令に基づくモニタリング，規制基準の遵守状況を確認するための試験検査等を目的に設置する機関」とありました。このとおりなら，「モニタリングを外部委託すれば財務管理上の利点が得られるとともに，専門的人材の育成から解放される」という発想は自然でしょう。たしかに，あらかじめ決められた手順で決められた測点の試料を採取し，決められた項目について決められた手法で分析して，結果の一覧表を提出する仕事，食堂に例えるなら決まったレシピで一品定食だけをつるく仕事なら外部委託も可能でしょう。しかし，環境行政に役立つ知見の集積，危機管理，事案対応となると話は別です。個々のフィールドはそれぞれ自然的，社会的な履歴を背景とする特性を持つので，すぐれたシェフのように，たとえば野菜の産地と栽培法を知って，その特性に配慮しながら他との調和を考え，前菜からデザートまでのレシピ・セット(調査・試験実施計画)を組み立てる必要があるからです。そして，個々の食材と調理法(現地と試験・分析手法)に精通しないと良いレシピは書けません。とはいえ，地域にあってこそ地域に役立つ地環研の意義について外部の理解を求めようとすれば，かなりの説明力を要することになるでしょう。

近年は，環境情報の発信・環境学習・出前講座など，地域住民への「説明」が重要視されるようになりました。測定結果の公表には対象とする事象の時系列的把握・現状分析・将来予測などを伴う必要があるのは当然としても，環境情報を地域住民に分かりやすく伝えるのはかなり難しいことです。第一に，環境分野にはCOD，$PM_{2.5}$，予測無影響濃度など，自然科学の用語で簡単には説明しにくい「業界用語」が多く，「汚染」と「汚濁」の区別も簡単には理解できません。そして第二に，できるだけ科学的に，正確に情報を伝えようと心掛けても，説明の受け手は頭で分かるのでなく体で感覚的に理解する，つまり腑に落ちることを求める傾向にあります。

こうしたことから，環境情報の発信者には，業界用語を一般用語に翻訳する優れた通訳であると同時に，ときには日常生活に引きつけて感性に訴えるような工夫ができ，そのうえ事の本質を的確に捉えて順序よく簡潔に説明できる能力を備えることが求められます。そうはいっても，優れた説明力が簡単に身に着くものではありません。日ごろから環境事象を系統的に理解し整理するように心がけ，優秀な高校の先生や優秀な営業マンを範として，分かりやすく簡潔に，相手が納得できるよう説明する能力を身に着けるべく努力しなければならないのでしょう。それが時代の要請だと感じています。